

例

年そんなにはしらないのに、定年退職したのとコロナが落ち着いたのとで、今夏は中学の同窓会などいくつかの集まりに声がかかった。どれも「満を持して」と誘われたのだが、ここへ来て第七波の感染拡大に見舞われ、いずれも中止になってしまった。とても残念なのだが、動けば動く、とはこのことか、集まろうとした時から思いも寄らないあれこれが動き始めていたのだった。

中学生の夏は、毎年キャンプと決めていて、段取りのうまい友人に準備してもらって、仲のよい四五人で海へと自転車漕いだ。長い長い坂を上り終えると、ガラスの粉を散らしたようなまぶしい日本海が見えてくる。雄叫びを上げて一気に下り、磯の香りを胸いっぱい吸い込み、服を脱いで海に入る。ズボンの下は海水パンツだ。テントを張る。薪を集める。泳ぐ。火をたく。飯盒で飯を炊く。泳ぐ。野菜を刻む。自転車を漕ぐ。食堂でかき氷を食う。泳ぐ。カレーライスを作って食べる。しゃべる。しゃべる。

日が落ちて、すっかり暗くなると、テントから出した頭が五つ並んだ。目が夜の闇に慣れてくると、誰彼の口から感嘆の声が上がる。見渡す限り降るような星空だ。そのうち見上げているのか見下ろしているのかもわからず、吸い込まれたようになって、空を見つめ

たま宇宙の不思議を次々としゃべるのだった。見つける度に声を上げた流れ星も、群れとなって縦横に軌跡を描くようになると誰も静かになり、願い事を三度言うのに集中した。

高校を卒業してからまったく音信不通だったHと四十数年ぶりに電話で話した。同窓会の連絡を取ろうとした何人かの試みがつながつた奇跡だった。中学三年生の時転校してきたHとはなぜか馬が合い、ほとんど毎日、教室で互いの家でおしゃべりや音楽に興じた。Hは「こっちがいい」と誰もが聞いているビートルズではなくローリングストーンズをよくかけてくれた。

電話では、互いのこれまでを語った。ぼくはほんの数秒で語り終えたが、Hは「ちよつと長くなるけどいいか」と少しはにかむように言つて曲折を語った。「元気に生きてるってだけで十分だ。」

とぼくは正直な思いを言つた。話しているうちに、キャンプで星空を眺めた話になった。

「俺はあの時に見た空よりきれいな空をあれから一度も見えない。」

とHは言つた。ぼくの中で冷却保存されていた中三の全部が急速解凍された。

「ぼくもそうだ。あんな空は一度も見えない。」  
本当にそうだと分かつたら、涙が出そうになった。

專業ババ奮闘記 (その2) 108

木幡智恵美

猛暑、コロナ5波 (1)

年々夏の暑さが厳しくなっている。豪雨が全国ニュースになってほどなく梅雨が明け、いきなり真夏日になったかと思うと、今度は雨が一切降らなくなった。八月に入ると、三十六度を超える日が一週間近く続き、これまで味わったことのない三十七、一度を体感した。梅雨明けからの猛暑、雨の降らない日は一か月ほど続くことになる。

息子が福井から帰り、三人の暮らしが戻った。夏休みに入ったので給食がなく、弁当持ちで職場に出る日があると思えば、有休を使って涼しいところに行くことも。とにかく連日の暑さで、人間だけでなく、野菜も大変だ。七月も終盤に近付いた日、早朝に出て夫と畑に向かった。その日は、私がゴンド畑で水やりとオクラの周りの草を取り、夫はカボス畑でやはり水やりとの刈払い機での草刈りと二手に分かれ、「一時間ほどで帰ってくる」と私をゴンド畑に置いて、夫はカボス畑に向かった。最高気温が三四度を超えた日で、陽はそう高くないのに額からぼたぼたと汗が零れ落ちる。オクラの周りの草を取り終わると、一時間ちよつと経っていた。夫はまだ迎えに來ない。携帯で連絡するが出ない。もしや、熱中症で倒れているのではと心配になり、荷物はそのままにして、歩いてカボス畑に向かう。一キロ離れた畑まで焼け付くアスファルトの上を歩きながら、もし、倒れていたらどうすればいいか考える。心臓マッサージはどうだっけ。もう少し真面目に救急講習を受けておけばよかった。いや、まずは救急車だ。だけど、カボス畑の番地が分からない。場所をどう伝えればいいだろう。畑に通じるわき道に入った頃から、心臓がばくばく言い、汗もどつと拭き出す。二本の梅の木の間を向こうにしゃがんでいる夫の後姿が見える。恐る恐る傍によると、刈払い機に油を注いでいるところだった。「生きてたか」まず、口から出たのはその言葉だった。

以来、この炎暑の間は草には目を瞑り、私一人で一日おきに水やりだけに通うようにした。スパーカブで往復約八十キロの行程だ。早朝に出るので、車が少なく、しかもまだ気温が一番低い時間帯で、肌寒くさえ感じる。帰りはすでに気温が上がっている農道を通る。山間は断然空気がうまいし、暑くはない。町中に入ると、信号で停まり、背中に汗が噴き出してくるのが分かる。でも、帰ればシャワーだ。それを楽しみにバイクを走らせる。



30代フリーター やあ、ジイさん。岸田文雄が安倍晋三の「国葬」の実施を決めた。岸田にしては珍しい素早さだ。「安倍派や保守層に配慮したのだろう」との見方を朝日新聞が紹介している（7月15日朝刊）。

年金生活者 この決定の早さはただの「配慮」からとは思えない。元首相の死が党内保守派の離反、長期的には党の分裂を招きかねないという危機感が背後にあると見ていい。

首相在任中の安倍晋三はタカ派の政策と経済優先の政策を交互に実行することで国民の支持をつなぎ留め、選挙に連勝した。首相退任後、とりわけロシアのウクライナ侵略が始まってからの彼は、核の共有の議論や防衛費のGDP比2%への増額を主張するなど、タカ派色を前面に出した発言をするようになった。それらの発言は、よく言われているように、保守層の自民党離れを予感して、それを食い止めようとしたためと推察される。

とりわけ今回の参院選では、保守の

政権に就いた。維新の源流となった大阪維新の会が誕生したのはそのころだ。最大の目標とした「大阪都構想」は大阪府と大阪市の二重行政を解消することを狙いとしていた。それは二重を一重にすることで「官」の権限を縮小することを意味し、「小さな政府」路線を具現化するものだった。

30代 維新がここまで伸長してきたのはなぜだ。

年金 これまで日本には「小さな政府」路線を部分的に取り入れる政党はあっても、基本路線として鮮明にした政党はなかった。その空白、未開拓地に維新は進出して支持を集めた。

そこに、大きな壁が立ちほだかった。新型コロナウイルスの蔓延やロシアのウクライナ侵略が世界各国の政権に強い「大きな政府」路線への転換だ。維新に逆風が吹き始めた。参院選で全国政党への足がかりとするはずの東京都と京都で議席を得ることができなかったのはその前ぶれと考えることができる。

野党である日本維新の会が躍進したり、保守新党の参政党が初挑戦で議席を獲得したりするなど、自民党以外の保守政党が勢いを見せた。安倍はそれを選挙の前から予感していたはずで、それが保守層の自民党離れや、最悪の場合は党内保守派の離脱につながりかねないと懸念していたと思われる。

岸田のはやばやとした「国葬」決定は、そうした危機感を受け継いだもので、元首相の死がそれを加速する恐れがあると判断したからだろう。

ヨーロッパ諸国ではフランスをはじめとして、右派政党が勢いを増し、左派・リベラル政党だけでなく、既成の保守政党を脅かしている。それは明日の日本かもしれない、と安倍も岸田も考えたに違いない。

30代 保守野党の筆頭の維新の会について朝日新聞が「描けぬ『次の10年』」の見出しで、曲がり角を迎えた党の現状を伝えている（7月13日朝刊）。

年金 ロシアのウクライナ侵略によって、世界各国で「小さな政府」路線か

30代 朝日新聞が参院選の当選者と非改選議員を対象に憲法改正について尋ねたところ、62%を改憲派が占め、その7割以上が自民党の改憲4項目のうち9条への自衛隊明記と緊急事態条項の新設を望んでいることがわかった（7月12日朝刊）。同社の世論調査で

ら「大きな政府」路線への転換が決定的となり、「身を切る改革」をスローガンに「小さな政府」を目指してきた維新に逆風が吹き始めている。党勢拡大はおそらく今回の参院選が最大で、ここまですが限界となる可能性が高い。

維新の会とその前身となった政党は、日本では珍しい「小さな政府」路線を鮮明にした政党だ。橋下徹が大阪府知事になって真つ先に手をつけたのが職員の人件費の削減だったことにそれがあらわれている。「小さな政府」路線は官の地位を下げ、民の地位を上げることの意味する。教職員に学校行事での国歌斉唱時の起立を義務づけたのは、国家主義的なイデオロギーを押しつけるためというより、公務員を規律で縛ることでその地位を下げる狙いがあった。

「小さな政府」路線が国政レベルで採り入れられ始めたのは「官から民へ」をスローガンに郵政民営化を進めた小泉政権あたりからだ。民主党も「官僚主導から政治主導へ」と唱えて

も、9条への自衛隊明記に賛成が51%と、半分を超え、それ以前の調査結果から逆転した。

年金 改憲派の議員たちはそれを追い風に改憲の議論を進めようとするだろう。だが、国民の多くは改憲に議員たちほど関心を寄せていない。世論調査では、岸田に一番力を入れてほしい政策で憲法改正をあげたのは6%に過ぎない。そんな中で改憲発議を推し進めるには、戦後の政治が経験したことのないエネルギーを要する。そのぶん国民が最も気にしている経済の立て直しや社会保障政策は今以上に遅れてしまいうだろう。

立憲民主党はこんなときこそ、自公政権に取って代わり得る基本理念とビジョンを構築するチャンスととらえるべきだ。いまの立憲にはそれが無いに等しい。確固とした理念と、たとえ反対があってもそれを実行に移す意志がないうちは政権に近づくことはできない。自民党が改憲にかまけているあいだに牙をとげ、と言いたい。

ニュース日記 840  
中村 礼治

## 自民・維新・立憲の難題